

私は先日、戦争を英語で伝え続ける80歳の女性、小倉桂子さん取材している番組を見ました。小倉さんは、戦争について知りたいと思っっている外国の方々に被爆体験を話したり、平和記念公園で通訳などを行っています。終戦から76年が経ち、戦争を見た人、知っている人が少なくなっています。戦争を知らず、想像することしか出来ない私たちに戦争を知ってもらおう。そして私たちが次の世代に伝える。「今まで伝え続けたバトンを手渡すのが私の役目」と小倉さんは仰いました。私が小倉さんから受け取ったバトンを次の人に手渡す為には、戦争について知らなくてはならないのですが、誰かに伝えるほどの戦争の知識はありません。小倉さんのお話を機会に、戦争について詳しく調べようと思いました。

戦死した画学生たちの作品が展示されている無言館。無言館には、自画像や家族、故郷の風景など「へいわの姿」が描かれた作品が並べられています。その中で一家団欒の絵が描かれている「家族」という作品があります。その作品は貧しい農家だったために毎日働き、一家団欒は一度もなかったという作者の伊澤さんが戦地に立つ前に、「家族にはこんな暮らしをしてほしい。」という夢を込めて描いた空想画です。その作品に込められた想いを知ったとき、胸が苦しくなりました。戦争などなかったら、伊澤さん自身がこのような暮らしをすることができたのではないか。家族で囲

平和へのバトン

上宮高等学校3年

駒井佑名

むご飯は当たり前ではなく、家族団欒こそが平和の象徴であること。この絵を見て、戦争への怒りを感じたり、日々の中にある幸せに気づくことができました。このように、日本のために戦ってくれた方々が残してくださったものを見て、戦争の残酷さ、普通の日々を送れていることへの感謝をかんじなければいけないと思いました。

多くの尊い命を奪った戦争。亡くなった人のほとんどに伊澤さんのように、大切な家族がいたでしょう。残された家族の気持ちを考えて、敵の国がとても憎いです。ですが、憎しみは憎しみをうみます。憎しみの負の連鎖を断つことが世界平和への道につながります。何かを憎み、恨む前に戦争のような悲しい出来事が二度と起こらないように、戦争を伝えていくことが私のできることだと思えます。次の世代へ平和のバトンをつなげるために、原爆ドームや無言館など、実際の地へ足を運び、戦争を自分事のように考える。戦争について友人と語ってみるなど、一人ひとりの力は小さいかもしれないが、その小さな積み重ねが平和への第一歩になると信じて行動する。小倉さんのように戦争を経験した人からお話を聞ける機会がある私たちには、次へ伝える責任がある。私たちにバトンをつなげてくれた人に感謝をしよう。この時代に生きている私たちがだからこそのことをしよう。